

資料紹介／

『昭和九年八月調査「未完」郷土の傳説（民間信仰史）』（山田一男著）

*佐川和裕・**加藤廣美

執筆者の故・山田一男氏は、明治四十一年に国府村（現・大磯町国府本郷）の旧家に生まれ、後に国府村役場（その後、国府町役場→大磯町役場）に勤務された。文化財や郷土史に造詣が深く、なかでも考古学に多大な関心を寄せておられたようである。武相考古学会に所属しながら地域に残る遺跡や遺物の調査を続け、さらには赤星直忠氏や石野瑛氏といった、神奈川県をフィールドとして活躍していた当時の考古学者とも親交を結んでおり、大磯に足跡を残されている両氏の水先案内人的な役割も負っていた。公務として文化財を担当されたわけではないようだが、文化財保護活動の先駆的な役割を果たしてきた人物といつてよいだろう。また、山田氏の収集した資料や情報は、現在でも当館の活動における大きな糧となっている。地元生まれ育ったことから、話者としても貴重な存在であった。

ここに紹介する『昭和九年八月調査「未完」郷土の傳説（民間信仰史）』も、山田氏の多彩な活動の一端といえることができる。原稿（原本）は山田氏と親交のあった鈴木昇氏（元・大磯町郷土資料館長）がご本人から託され所蔵しているものである。内容は国府村に伝承されていた伝説や世間話をはじめ、地名、神社、祭祀の由来などが取りまとめられている。調査年代からすると、既に役場に就かれていたものと思われるが、公務として調査したものなのかは詳らかでない。また、原稿の余白に注釈やメモが多数記されており、いわば草稿の段階であることが分かる。それゆえ執筆者自身「未完」という言葉を添えており、いずれまとめ上げて活字化するつもりであったと思われる。なお、山田氏は、既に昭和八年にも旧国府村に伝わる童謡や仕事歌などを調査されており（昭和四十年、大磯町教育委員会において『大磯町の古民謡等（旧国府地区）』という標題で簡易製本済）、この時期に民俗的な調査活動を盛んに進めていたことがうかがわれる。いずれにしても、昭和初期における調査の記録はたいへん貴重であり、現在では聞き取ることでできない事象も数多く含まれていることから、ここであらためて活字化する意義は大きいと考えている。ただし、余白の注釈やメモについては、忠実に記載することはむずかしいため、各項目後にまとめて記しておいた。

なお、本資料を紹介するにあたり、鈴木昇氏、鈴木一男氏からご教示をいただいた。記してお礼申し上げます。

【*当館学芸員 **当館臨時職員】

新宿

地蔵尊の傳説

私の町内に廻り地蔵尊があります。或日隣の老人に其の由来を聞きました。傳説に曰く

昔、徳川の初代の頃難波（浪花）の豪商淀屋辰五郎とか申す人が千石船に絹布綿布を満載して江戸に向かって出帆した。

船は矢の如く白波をけって走って来ると次第／＼に風が強くなり、此の沖合に差掛るといよいよ大暴風雨となりました。船はてんぷくせんばかりに揺られ、荷物は流し、激浪と戦ふうち、かちは折れ、帆は裂かれ、恰も木の葉の如く押流され必死となりて逆巻く波をふせげども食に食物もなく、空腹と疲労で最早晝すすべもなく唯天に祈り地の祖先を念じ、進退谷り、一同体に綱を結び帆柱に縛りつけ、手を合せ、南無阿彌陀佛を唱へ漂流してゐた。

やがて夜は徹し、暁の頃、村の漁夫が風を冒して浜辺に行つて見ると數丈の怒涛は岸にくだけ、飛沫は濛々と白煙の如く天地を覆ひ、実にせいさんを極めた。かすかに沖合を望めば黒きもの一つありました。よく見ると難船らしいからすぐに家に帰り繞を破つて警鐘を乱打した。皆驚き飛起れば、それ難破／＼だ、村民は拳つて救助に浜辺に馳集り忽ち黒山のやうな人出でした。

目の前の船を助ける術もなく互に手に汗を握つてゐた。やがて岸に近づくと數丈の狂浪にさすがの巨船も一呑にされ、あはれ船はみぢんとなり、人の影も見えず、一同暗涙にむせぶのみ。

かくて不思議や奇蹟的にも一人這ひ上り或は波に打上げられ、或は綱を投げてつかませ引上げる人もあり辛うじて乗組員全部が助けられた。然れども安心したか一同は氣絶した。村民は大聲をあげて激励し、応急手當を施した。

暫くして一同は蘇生した。彼等は無上の喜びに満ち、暫く滞在休養し、こゝに記念の為一堂を建立ししかも本尊は此の地蔵尊であります。此の堂を南船山海保寺と稱へました。彼等は厚く礼を述べ故郷に帰りました。

爾來幾百の星霜を経て来たが堂は荒廢し人々は狸堂と稱へました。

今より百數十年前大一坊と申す人が本尊を背負ひ西は伊豆東は三浦迄津々浦々の漁民に説法し、基金を集め、歸りて堂を再建し、若衆堂と稱へました。自ら寺子屋を開いて子弟の教鞭を取りましたが、師が没して再び荒廢した。

大正六年村(町)民が彩色し今は金色光々と最も神々しく町内家内安全のため各家順にお宿をして廻つて居られます。

*文献があるかも知れぬ。

「石井おちいさん」

今井小平宅の西隣の人、

南堂(南船山海保寺)

跡(三島農園)内ニアリマス

毎年一回 杉山倉蔵様に安置し

新宿中の老人の念佛供養があります

四月二十三日に行ひます

中丸

なこうの十三塚

昔どうのしろ(堂ノ後)のなこうといふ所に大勢の武士が住んでゐましたが、ある戦争のためになくなった武士をなこうといふ所にいけましたが、其の中で知られてゐるのは十三人の塚ださうです。

今でもどうのしろのなこうといふ所には洞穴がたくさんあつて、とても大きな穴もたくさんあるさうです。人に聞くと昔は武士がたくさん住んでゐたといふことです。

其の十三人の塚を今でも十三塚といつて呼んでゐるさうです。

*なこうは中丸の人だけが言ふことは 馬場などでは言はない、

*「塚」の成立年代が大へんちがつてゐる 但し、民間ではかく信じてゐる

*塚は有史以前

生沢

生沢と寺坂との境

今の境は川になつてゐますが、昔、幾年か前に一人の順礼が此の川で死んでゐた。

それを寺坂の者は片付けないで、生沢の者が片付けたので川から向ふは生沢のものでさうです。

昔は川の向ふも少しは寺坂の分だった。証據には、すぐ川の向ふの家の少しは、墓場も寺坂にあり、一月十四日の「さいとばらい」も寺坂であります。

寺坂

馬捨場

寺坂の中部□の所に松山といふ小山があります。

その三角の底辺が五メートル位、斜面の片□が三メートル位、片方が三メートルと五十センチ位の所へ死んだ馬を捨てたさうです。

*塚は官地 税をとらないからそこをひらいては松でも植えて、馬をすてたのだ

*馬捨場と松

*人間の□□と馬捨場とはつきもの

新宿

日吉神社

日吉神社は大へん大昔からの神社ださうです。名は忘れましたが或神様と木花咲耶姫の御二人がおまつりしてあるのださうです。

或時、頼朝の妻政子がお産が無事で生れるやうにといつて、神社のそばにさらと清く流れてゐる山王川の水で身を浄め、更にその水を飲んで日吉神社におまゐりしたさうです。

かなり古からの神社らしい事がわかります。十三箇所とか十二箇所とかの昔の名高い神社の中に入つてゐるさうです。石段が二ヶ所ありますが鎌倉時代ださうです。

*風土記

日吉山王社

本地佛三尊彌陀 六月十五日

建久三年

頼朝夫人□平産所のため神馬を奉りしことあり

十二社の一として

新宿

六所神社

六所神社は今の場所の西北の石神臺にまつて、あつて、山の東の下の小さな山に「ほうぞうぐう」があつたさうです。今でも芝山で残つてをります。そして宝永元年に今の所にうつしたさうです。昔は国府の町のお祭りには京都から勅使が来てお祭りをすましてゐつたさうです。

*石上臺 石を御神体としてまつてある

中丸

相模国府趾

一番先は村長さんの宅地附近らしいと調べた方が言つて居られたが、少し変なのでよく調べたら今の神揃山麓通稱大畑地内が相模国府の趾とわかつた。理由は郷土交通の調査研究の結果、古東海道が現在の畑に沿つて東西に通過し、東は隣町大磯高麗山脚部より城山の裾を通つて大畑に至り、西は押切から二宮神社を通つて北は西久保、黒岩、虫窪の各村落を経て大畑に至る道路、それで国府が当地に置かれるに至り相模の五社が国府趾上の神揃山に渡與して祭事を執行し、今なほ行つてゐる。

その他研究資料として集められた材料が山積されてるそうだと教へていた。

中丸

かり宿

今私達が住んでゐる所をかりやどと呼んで居ります。

それはずっと昔、大雨で裏の川が氾濫して向ふへ渡ることが出来なくなつて、六月の国府の町に神様がおよりあひが出来なくなつてしまつたので、困つて何でも此の川のこちら側で假にやつたので、かりやどと言ふのださうです。

一説に頼朝富士川より歸り國府即ち假宿につき恩賞を行ふと、つまり國府廳が衰へ別に宿とすべき建物もなく假宿で行つたと云ふ。

新宿

六地藏様

昔は六地藏様が今住んでゐる「かんさん」といふ家にあつて、其の近所に六地藏様

があつたものさうです。そこにお堂があつて其のお堂の名前を「ちんちの堂」といつたさうです。そしてその入口に六地藏様があつたさうですが、今は海岸に行く方の

道のそばに赤いたすきをかけて六人ならんでゐられます。それを今では六地藏さんと呼んでゐます。南船山海保寺のもので、六地藏とは六道□□の佛□六つ祀るのです。

*三島農園の裏

*新宿では化地藏と呼んでゐる

*子供の冥福を祈る、死んだ子がつけたものを着てもらふ、

馬場

座問答

一宮さんは相模總社だから俺が一番だと国府の町に言はれた。二宮さんは俺はその外国で生れて長男であるそれだから母の所へ俺が一番先に行くと言はれ、さうすると一宮さんは相模總社だからおれが一番先に行くと二人で争つた。さうすると三宮さんがそんな事を言つてゐると遅くなるといけないから、明年々と三宮さんがあづかつて一宮さんが先に行く事になる。

馬場

ぼんをどり

七夕の歌

タナバタ様や、タナバタ様や―

いちにたんじやく

あげますほかに

この手をあげて下しやんせ。

新宿

私の家の話

私の家が今立つてゐる所は昔竹藪だつたさうです。そうして下の田の左の方に大きな建物があつた。トヨカワさんといふ別荘があつてその中にお堂があつて森みたいになつてゐて夜になると家へ来て父の名を狸が呼んださうです。

或晩の事も父もねてしまつたあと、「治郎ちゃん」と呼んでゐるものがある

ので母が急いで起きてみると誰も居ない。

さうして又ねると其のうち又来て「治郎ちゃんくく」と呼んで何にも見えず、唯聲ばかりして姿が見えないさうです。

度々母も狸にだまされたさうです。

生沢

老婆のか[□]てる

昔は私なんか若い時分角の前でよくをどつたもんだ。遊ぶ時は遊んで、働く時は一生懸命で働いたもんだ。このせつの者はだら／＼してゐる。

此のせつの者は畠へ行くにも「ヤウキ」のものを着てゆくが、昔は「紺の地織り」の袴天と股引で出かけたものだ。

生沢

池

東西の池は田の用水として応仁天皇時代に造られたさうです。明治維新時代に寺坂と生沢の境の論があつて裁判所へ出た結果生沢が勝ちました。

*寺坂と生沢との[□]証文書が半分づゝある

身代り地藏様

1 武士

2 お姫様

3 絹商人

4 御用度金警護の武士

ギオン塚

祇園塚は、昔京都から公卿様が来て、よい景色なので京都の祇園町をとつてギオンヅカと言つたのです。ギオン町の清水の観音さんもあります。

新宿

石上臺

こ、は昔お六所様がお下りになつたさうです。

新宿

天皇森

こ、は昔は森で「ギオンコス天皇(祇園牛頭天王社)」といふ天皇様がこ、におさめてあつた。それは今お六所様にあるお天皇様がそです。その森は今ひらいて畠になつてゐます。その畠の真中に「サイノカミサマ」があります。

新宿

血洗川

武士を切つたものがその刀を小磯の方の川で洗つたのださうです。だからその川を血洗川といふのださうです。

*1刀を洗つた

2身体を洗つた

新宿

私の家の畠の中の塚

家の畠の中間に大きい塚があります。私はその事を方々の人や家のおばあさんに尋ねると次のやうに話されました。

あの塚は大昔からあるけれども昔の人は馬の死んだのがいかつてゐるのだと言つて誰も手を付けなかつた。ところが段々世の中が進んでいくに従つてあの塚の中には金の刀が三振り、銀の茶釜やいろ／＼の金銀の立派なものが沢山入つてゐるのだ、そうはさされるやうになつた。

誰でもそれがほしくなり、その畠の中の塚をくづしに来るのでおぢいさんは塚のそばに小さい家を建て、番をしてゐられた。

その話を聞くと掘りたくなるだらうが、あれを掘れば掘つた家の者が三人一緒に病気になる、二人は死ぬといふ言傳へがある。だからみんな心ではほしいと思つてもそれが恐いために誰も取りに行かなくなつた。さうして今でもちゃんと昔のとほりあるのだ。

*塚に対する一般信仰の代表的なもの

生沢

なきの原

所は虫窪、主は土沢村ヤサーの人。昔親子二人淋しく暮してゐた。一家母親と息その息が伊勢参拜に行った。

けれども日が暮れても帰って来ない。たまりかねた母親、今の泣の原まで迎へに来たけれどもなかく帰って来ない。泣き／＼七度行ったり来たりした。けれども帰って来ない。とう／＼母親は泣き／＼一生こゝで終へてしまったので、こゝを泣の原と云つて今地藏さんにまつてあるのだそうです。

この泣きの原は縁起が悪いといふので、祝言は此の道を通らないそうです。

生沢

たかとり山

徳川氏が参勤交代の判を定めて以来、東海道は年々大繁昌だつたさうです。

或年箱根を越して来る大名がありました。大名のそばにはたか持といふお侍がゐたのださうです。丁度此の村の近くまで来ました時に肩に止つてゐた鳥が急に飛んでたかとり山へ逃げて来ました。そのたかを此の村の或人がおさへて殿様の所へ持つて行きました。

殿様は大喜びで「たかを取つた山はたか取山といふ名を授けてやる」とおっしゃつてたか取山と言ふのださうです。そしてたかを取つた人はたか取山から流れて一番先に入る御神田といふ田をもらひました。その田は今でも残つてあります。

*たか狩 栗原山

中原御放鷹の村

前羽鷹 大野村

中原の 中原御殿

生沢

たかとり釣鐘

或大雨大風の時、たかとり釣鐘が横の谷へ落ちました。その釣鐘が大蛇になつて門の所にある大きな石の下にかくれたのださうです。

そしてその石を眞夜中に七回眼をつむつててんがらをかい廻るとその大蛇が出ると言つてゐますが、今だにだれもまわつたものがないそうです。

生沢

生沢寺坂の境

私の家のそばに昔から今まで土地の変つた所が一所あります。そこは昔は寺坂分だつたのですが今は生沢分になつてゐます。

昔はよこまくりといふ所が寺坂と生沢の界だつたさうですが、今はそこから十数間東の方をたかとりから流れて来る川が界となつてゐます。従つてその所にあつた二軒の家も生沢分になつてゐます。次図のとほりです。

(図省略)

泣き野原とイボ取石

この野原に行くといふのがまるめに見え川尻が見えます。

或一家があつたとさ。夫は外国へ洋行に行くといふので一ヶ月位たつて妻は毎日野原に立つては遠い彼方を眺めては待つていたが何日たつても夫の影形は見えない。今日も思つては野原でしく／＼泣きながら待つてゐたが、あまりのかなしさにとつ／＼野原で泣き死んでしまつたといふ話。

今でもよく浜が見えます。まるで円のやうになつてゐてその一部に小さな石碑みたいなものに石が五つ六つあります。

一つ借りて来てイボをこすると治ると人はよく借りて来ます。「一つ持つてこつてばな二つけえすだど。二つなら三つだど」と治るか治らないか実際にやつて見たことがないけれどもちゃんと其のまわりは芝がきれいに青々と生ひ茂つてゐるさうです。

*なきのが原のなき石

子供が夜泣きすると

その石で□をこすると

よい

泣きの原のおまじなひ